

たはら 歴史探訪 クラブ 其の84

TAHARA
History Inquiry
Club

まぼろしの古窯、渥美窯 3

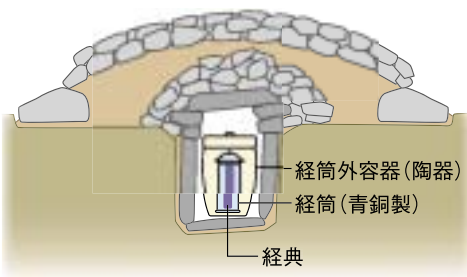
〜伊良湖東大寺瓦窯跡〜

前号では経塚の説明ができませんでしたので、まずはそのことに触れたいと思います。

釈迦の入滅（死亡）後、仏教は段階を経て衰え、人はどんなに修行しても効果は得られず、人の心はずさみ、天変地異が起り、はかなく悲観的な考えが広まる時代… すなわち、「末法の世」になるとされています。日本にはこの「末法の世」が、永承7年（1052年）に訪れると信じられていました。

末法思想にみられる悲観的な考えを開放するのは弥勒菩薩で、56億7000万年後に現れ、人々を救済するとされています。この弥勒出現のとき、お経がなくなっていることにより救いが得られないといけないうことから、人々はお経を書写し、地中に埋め、保存しようとした。こうして、経塚がつくられるようになりまし。

この紙に書き写したお経は、そのまま埋めては腐ってしまうため、容器に入れる必要がありました。そのため焼かれたのが「経筒」と呼ばれる容器ですが、渥美窯では、この経筒や宗教の儀式にかかわるさまざまな道具が焼かれていました。同時期の他の地方の窯場との違いがここに認められます。



経塚の様子

さて、みなさんは、奈良の大仏様、東大寺をご存じですね。修学旅行の定番であるこのお寺は、法隆寺と並んで日本では有名なお寺です。この東大寺の屋根に葺くための瓦を焼いた窯が田原市にあるのです。その場所は、田原市の西側、伊良湖町にある豊川用水最終調整池・初立ダムの堤防のかたわらにあります。「国指定史跡伊良湖東大寺瓦窯跡」です。



伊良湖東大寺瓦窯跡

江戸時代の記録に「伊良湖崎の山間に初立といふ所あり 貞享三寅（1686年）八月農夫古き瓦を掘り出す。径七寸ばかり」と記され、「東大寺」と刻まれた軒丸瓦が示されています。また、「東大寺草創の時瓦をつくりたる」とも示され、伊良湖東大寺瓦窯跡を、752年に東大寺が創建された時の瓦を焼いた場所

としています。このほかに、江戸時代の古文書にはたびたび伊良湖の東大寺瓦が紹介され、人々の関心を引いていたことがわかります。

さらに時代をさかのぼると、田原城跡からも、伊良湖東大寺瓦窯跡で焼かれた瓦が発掘されています。瓦は戦国時代（500年前）の地層から見つかっていますので、田原城主であった戸田氏が「東大寺大仏殿瓦」と刻まれた珍しい瓦を手許において、愛玩したものと思われる。

東大寺

は今も昔も人々に名の知れたお寺です。しかし、その名を記した瓦がなぜ田原市で見つかるのかは、昔はわかっていなかったでしょう。（増山）



田原城で見つかった「東大寺瓦」

文化財課（華山会館2階）

23局3531 FAX 22局3811

前号で、大アラコ窯跡の指定を昭和42年と紹介しましたが、昭和46年の誤りでした。ここに訂正いたします。